不況にどう対処すべきか

近代化研究会 3月定例会

近代化研究会では、3月定例会に「商工石川」編集主幹の青柳美喜男氏を講師に招き、勉強会を開催しました。以下にその一部を御紹介します。

日本全体にとって、今はどんな時代かというと国際化、成熟化、老齢化という3つの時代であるということがはっきりと出ています。

さて地方の問題に目を移してみますと、2～3年前から、いわゆる地方の時代ということばが盛んに使われはじめてきました。このことばは革新の知事が使いはじめたので、政府はあまり使いたがりません。従って政府刊行物のほとんどは、地域の時代ということばを使っています。どちらにしても地域、地方の時代であるということに変りはありません。私は地方の時代とは今の内に、地方に力をつけてほしいという時代であると思います。ですから、皆さんにはもっとがんばっていただかなくてはなりません。

今、日本は3年連続の不況です。これは大正末期から昭和初期にかけてのもの以上の長さで新記録を更新中です。昭和56年後半からが特にひどく、出口なき不況といわれました。ところが去年になると出口を求めての模索というようになりました。今年はその中から選択と実行の時代、できることなら出発といきたいものです。

私は昨年200回以上の講演をしてまわりました。が、どこででも「こんなはずじゃなかった。」「もっともうかるはずだった。」ということを耳にしました。ものの売れない原因はいろいろとありますが、それはお客を知らないということに尽きると思います。今、小売商でやる気のある人達はメーカーとの直取引を減らしています。少しぐらい経費がかかっても問屋さんからとろうとします。何故でしょう？　メーカーから仕入れるとその商品のことしか分からないのですが、これに対して問屋のセールスは小売店をいろいろとまわり情報も入って来ますし、売れ筋も分かっています。又、実際にあった話ですが、ある商店街の店ぞろえに問屋が協力しているうちに街づくりにも参加していたということです。これからは商品を販売するだけではなく、小売店に対して教育をする店、しない店でその問屋の評価がついてくると思います。

「去年と同じ商品を同じお客に同じ様に売っても利益はない。去年と同じ商品なら、去年と違うように売って、その変えた分が利益である。」という外国の経営者のことばがあります。たとえ同じお客であってももちろん去年とは変わっています。

これからの時代に必要なことは、自分の立場を変えてみてみる、つまり顧客の立場になってみるということです。それと人間関係。小売商と担当者が親戚づきあいのような人間関係をもてることがステイタス・シンボルとなってきます。つまり誰と付き合っているかということが重要になってくるわけです。

戦国武将の経営戦略　その3

虹のようなコンサルタント団

《徳川家康のグループ経営》

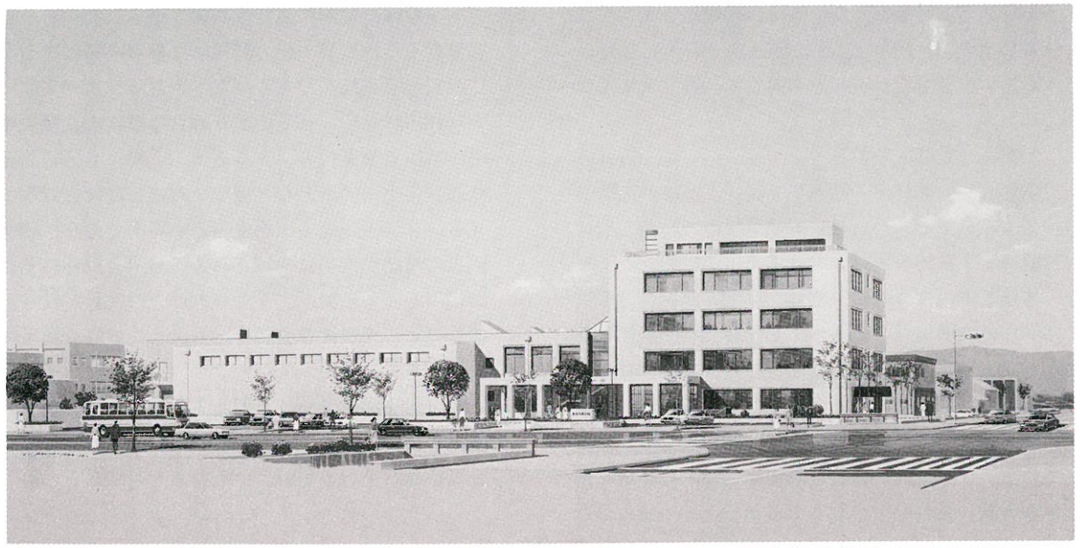
信長は天才であった。天才は自分の創造性を確信して疑わない。信長にはこの自覚もあった。だから、彼はコンサルタントを必要としなかった。若き日の守役、平手政秀もまた、天才青年信長には必要でなかった。信長の生態を彼は真に理解できず、彼がひたすらに注いだのは親のような愛情であった。天才は周囲を見廻わすときに、吸収するものが少ないという嘆きがある。信長は相談役を不要とした。

秀吉はその信長を側でみていた。その結果彼が悟ったのは、天才といえども十に一つは間違えるのだーという実感である。活達、縦横な才智を抱いていた秀吉も、この実感からコンサルタントの効用を知った。竹中半兵衛と黒田官兵衛という二大コンサルタントを両手に持った秀吉は、中壮年の怒濤期を乗り切った。もっとも少年期の秀吉も、外部の下請業者として、同志的に誠実で活動的な、蜂須賀小六を頂点とする野武士団との交流があった。このことは、コンサルタントや外部協力者の力を高く買うならいが身についた事情にちがいない。しかしその秀吉も、晩年は相談役と相談相手たるべき人々を命運つたなく次つぎと相談相手たるべき人々を周囲から失っていったし、残ったコンサルタントを重視しないくせがついた。これが秀吉の悲劇の一因であった。

徳川家康は、先行する二人の先輩の失敗の原因の一つを、よくよく見抜いていた。信長の中途挫折、一代限りの秀吉、その二人の悲劇を回避するため、多角的な用心深い自己規制と思索の発展のシステム化をはかった。彼のうしろには、大空に立つ七色の虹のようなコンサルト団が作りあげられた。側近はもとより、経済人、学識経験者、文化人、エンジニア、宗教人、外人などにわたって、家康の相談相手は丁度雷が太鼓をつづった輪を背負っているように出来上り、家康のまわりをとりまいていた。そればかりではない。家康は自分の息子たちにも、自分の分身としての権能の高いコンサルタントを守役としてつけるのを忘れなかった。これらのコンサルタントは家康の息子たちの師であり、場合によっては、息子に切腹を迫れる位の権能をゆだねられた人たちであった。徳川十五代、世界にもまれといわれるような長期安定経営の基礎を支えた家康のしかけの一つが、このコンサルティングシステムである。

協同組合 金沢問屋センター

第25号　1983年4月発行
協同組合　金沢問屋センター
発行者　小川甚次郎
金沢市問屋町1丁目
電話　37－8585



「金沢流通会館」完成予想図

金沢流通会館建設着工に寄せて

広報委員長　稲本　弘

協同組合金沢問屋センターの組合員各社にとってかねてよりの課題であった一つの事業。組合員相互の連帯意識を具現化し、共同事業をより促進するための一つの場としての新会館の建設。多年にわたって心の中に抱き続けて来たこの大きな課題も、去る3月1日にとり行われた金沢流通会館建設工事着手の地鎮祭によって、力強くその第一歩を運び出す事になりました。組合員の一員として誠に御同慶の至りで御座います。

現在私達の周辺を取り巻く諸般の状勢は誠に厳しく、国内外を問わず難問題が山積し、正に不透明とも形容されるべきこの時節に、かかる大きな事業が組合員相互の意志統一と協調の下に実現の運びに移されるという事は、相互の心のきずなの強固さを再確認すると同時に、対外的にもアピールする面に於いても意義深いものであろうと思われます。

新会館の業容、施設の内容については、プロジェクトチームの方々を中心に、多くの日時を費やし研究検討を重ね、再々の改訂を加えて結論に達したものである為、機能的にも又経済効率性・実用性の面から見ても、流通団地の会館としては正に画期的なものとなる事が期待されています。その設備に技術の粋をこらし多目的に利用される事を特色としている大コンベンションホールを始め、展示室・資料閲覧室・教育研修室等々、その設備は多岐にわたり、それはひとり組合の日常活動の場や組合員個々の事業の発展に資するにとどまらず、員内員外を問わず教育・文化・情操、更には地域社会への貢献の面に於いても広範囲に利用される事を目的としております。特に本館に隣接して建設されるコンベンションホールは近年提唱されるコンベンション・シティ構想の一翼を担うものと期待されるわけであります。

金沢問屋センターの新しいシンボルとしての金沢流通会館、それはとりも直さず金沢市の都市開発計画にも関連し、更には北陸経済圏の今後の発展の為にも多大の貢献をするべく運営利用されるべきでありましょう。

会館の運営に当っては今後会館運営委員会が設置され、飽く迄も事業としての認識の下で、衆知を集め積極的且つ効率的な運営がなされるべく図られるわけでありますが、これと共に組合員一同この際更に連帯の意識を高め、一致協力して私達の誇るべき金沢流通会館が、将来へむけて一段と輝きを増す様努力しようではありませんか。

金沢流通会館着工

3月1日、午前9時30分より金沢市問屋町61番地（問屋町第1児童公園）にて、金沢流通会館新築工事の地鎮祭が行なわれた。当日は快晴に恵まれ、関係者約100人が出席し、小川理事長が鍬入れを行なった後、代表者らが玉串を奉奠して工事の無事を祈った。

金沢流通会館は本館とコンベンションホールからなっており、本館が4階建てで延べ2,952㎡、コンベンションホールは1,441㎡で平屋建て。総工費は10億円で昭和59年3月末に完成予定。

本館1階にはロビー、売店、レストラン。2階には95坪の特別展示室がある。これは3つに間仕きりができ、小規模な展示会に向いており、団地社員を対象にした即売会なども企画できる。また伝統産業の普及宣伝につとめる特産品常設展示場も併設されている。3階には事務室、応接室の他、流通業に関する書籍、資料などを取りそろえて広く一般に公開する資料閲覧室などがある。

4階には研修室がありコンピューターを使った教育訓練設備や最新の視聴覚機器を備え、150名が収容できるため社員の能力開発には最適の場になろう。

最大の目玉施設であるコンベンションホールは、350坪の広さで、せり上がり舞台や最新の音響、照明、空調設備を持ち、200坪と150坪にも区切れるため、大小の展示会など用途に対応した使い方ができる。又、平屋建ての為搬出入が容易であり、設営撤去の時間が大幅に短縮される。展示会以外の多目的使用も考えており、1,000人以上の人員が収容可能なため、大規模な会議やパーティなどにも利用可能である。

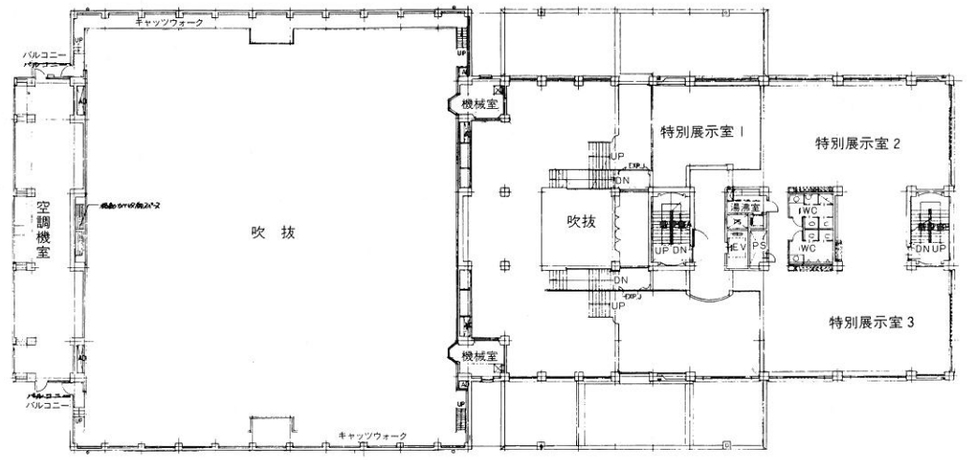
同会館は完成すれば全国地方卸売団地では最大の規模の施設となり、金沢のコンベンション都市構想を具体化していく先駆けにもなるものである。

金沢流通会館平面図

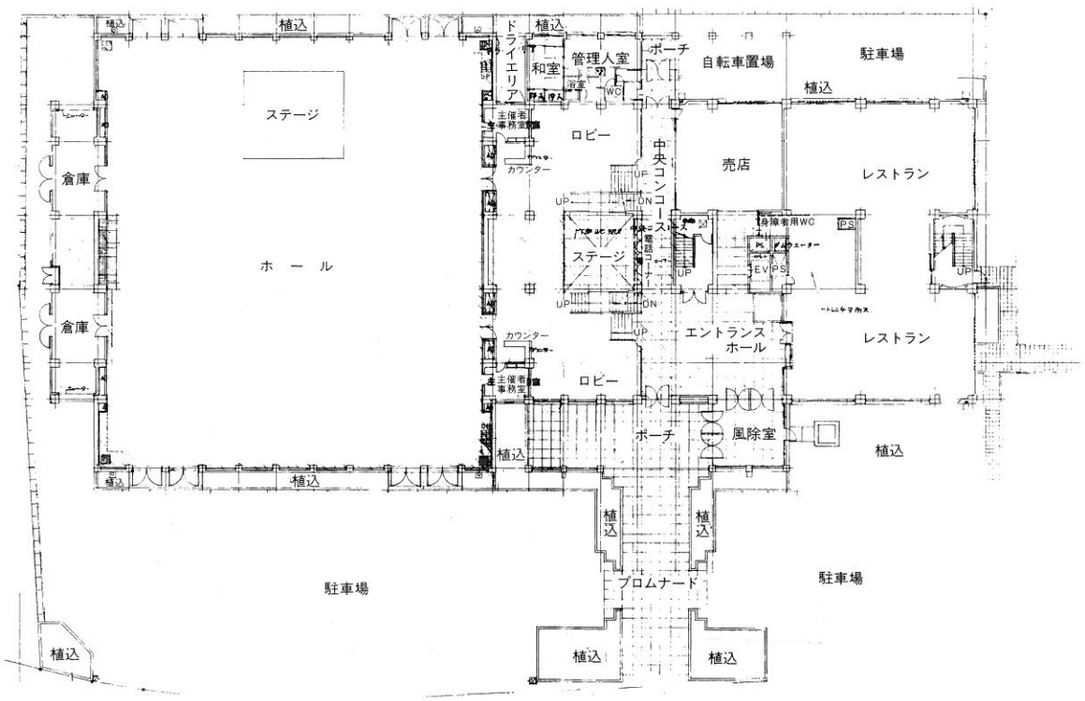
3 階

4 階

2 階



1 階



臨時総会開催

去る２月21日、金沢流通会館建設に関する臨時総会が金沢問屋町会館において開催され、次の通り承認された。

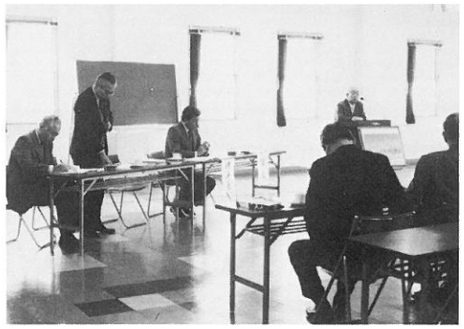
1. 総会の種類　臨時総会
2. 招集期日　昭和58年２月８日
3. 開催期日　昭和58年２月21日
4. 開催場所　金沢問屋町会館
5. 組合員総数　154人
6. 出席総数　本人出席80人　委任状出席56人
7. 議　　長　小川甚次郎
8. 議　　事

午後１時、金子専務理事より出席人員の報告、開会を告げ、小川理事長挨拶後議長選出に入る。司会者より選出方法について全員に諮ったところ、司会者一任の声があり、全員の賛成を得て理事長小川甚次郎氏を指名、全員の賛成があって小川甚次郎氏議長席につき議事に入る。

第１号議案　流通会館建設に関する件

議長は宗広副理事長に原案の説明を求めた後、議場に諮ったところ全員異議なく次の原案どおり承認した。

名　　称　金沢流通会館
建設用地　4692.84㎡（1419坪）
金沢市問屋町２丁目61番地
（第１児童公園）　2,588.43㎡
金沢市問屋町２丁目62番地
（共同駐車場）　1,652.88㎡
金沢市問屋町２丁目65番地２
（共同駐車場）　451.53㎡
建物総面積　4,854.71㎡（1468坪）
総工費　1,000,000千円（建築工事、電気設備工事、設計料）
30,000千円（什器備品、その他）
工　　期　昭和58年３月１日～昭和59年３月31日
地鎮祭　３月１日　午前９時30分



第２号議案　33%増資に関する件

議長は川上財務委員長に原案の説明を求めた後、議場に諮ったところ、全員異議なく次の原案どおり承認した。

昭和58年３月31日現在の持口数の33%を58年４月30日を期限として払い込む。その後、58年５月31日現在の払い込み済持口数の10%を無償交付する。

以上で議長は本日の議案を終了した旨を告げ、午後１時50分閉会を告げた。

近代化研究会創立10周年 記念祝賀パーティー

金沢問屋センター近代化研究会（島崎政幸代表幹事）の創立10周年記念祝賀会が、２月27日金沢ホリディインで会員家族180名が参加してなごやかに開かれた。祝賀パーティに先立って、会員と会員夫人が境野勝悟先生を講師に迎え『子供を伸ばすのは父の力だ』と題して、子供の教育についての話を聞きユーモアあふれる話の中にも考えさせられるひとときを持った。（別記）またレクリエーション協会会の指導で子供達もトリム体操やゲームを楽しんだ。

正午から始まったパーティでは来賓の小川理事長、代表幹事、前代表幹事宗広満夫氏の祝辞に続き、金子専務理事の乾杯音頭で10周年を祝しなごやかな家族親睦がひろげられた。パーティは田村副代表幹事の司会で進められ、ビンゴゲームでBINGOのカードによるおたのしみ景品、会員家族の紹介と続き、家族のかくし芸大会では、小川利郎氏のソロギターに始まり、大沢一家のほほえましい我家のホームソング、丸岡氏夫人の堂々とした歌いぶり、若林氏令嬢２人による「３年目の浮気」のデュエット等々。会員ＯＢでは楠氏のベッサメムーチョ、田中氏の相撲甚句等十八番が披露されてあたたかい拍手が送られた。祝賀会も会員とその家族が多数参加されて、なごやかな雰囲気で終始した。

近代化研究会10周年記念講演

〝知、情、意〟「心の教育」

最近新聞をにぎわしている校内暴力、非行等々学校教育が非常に問題となってきておりますが、現在の犯罪の43%が青少年の犯罪でありその内半数が中学生以下の非行という時、あらためて、家庭教育、学校教育、社会構造全体が一体となった取組が必要と思われます。このような中で、近代化十周年記念にあたり、教育問題研究家、境野勝悟氏をむかえ、〝子供をのばすのは父の力だ〟と題し、講演をいただきました。

会場には近代化のメンバーと婦人多数の参加を得、なごやかなうちにも、真剣なまなざしの中に終始いたしました。

氏は早大出身、私立栄光学園で18年間にわたり教鞭をとられ、昭和45年私立慶陽館（神奈川県大磯）を設立され、〝心の教育〟〝太陽の教育〟を教育の指針として、小学５～６年から中学３年の子供達と各自の才能にあった教育を実践され、又イギリス、フランス、イタリア、オランダ、ノルウェー、スウエーデン等を歴訪され、西欧諸国の教育事情にも精通され〝生きた教育〟を実践されておられます。

《要　旨》

現在、母親が子供に対し一番希望することは、①子供にもっと集中力が出来ないか、②やる気をもって出来ないかとかいうことで、我子は、①勉強しない、②ぐずである、、③言うことを聞かない、④後片付けをしない、などのなやみを多数もっている。しかし、このすべてがみなされない、出来ないから子供であると言う見地に立って、子供に過ぎたる期待、誤まった期待をもつのではなく、自分の子供の頃を考え、その感覚に立って、子供をみなければならない。子供に対してやりたくない時にやらすのは、忍耐でなく、残酷である。

現在、学校教育、社会構造が、知力偏重の社会になっている。人間には、長い人生を通じて、知、情、意、の３つがある。今の学校教育が、この知識集約のみにはしり、情(情緒)、意(精神力)をわすれた点数のみをもとめるかぎり、落ちこぼれがあり、不良、非行がもっと増大すると思われる。

人間には天性と言うものがある。生れつき記憶力のすばらしいコンピュータ人間、記憶力人間がいる。以前は、東大など有名大学へ入学しても、知情意のバランスのとれた学生が、青春を謳歌したように思う。しかし、現在は記憶力のみが肥大に発達したコンピュータ人間、欠点人間が入学し、行動力のない受動的な人間集団が一流校へ入学する偏重な社会構造に問題がある。

人間には先天的に独自のものを各自がもっている。すなわち、①記憶力の良い人　これは18才でその伸長がとまり、20才すぎればただの人、、②創造力の豊かな人　これは30代に開花する。小説家、芸術家など一芸に秀いでた人、これは全部記憶型と記憶要点型の差である。この記憶力、創造力にかけた人は、③統合力である。これは40代で開花する。すなわち、能力、体力がないが自分の努力で、人を生かし、掌握する力、である。この３つのない人は　④融和力である。これは50代に始まる。この人のもった人間的魅力である。才能は時期がくれば必ず咲くように思う。記憶型、創造型人間は小気であるが、統合力、融和力をもった人間は遅咲きであるが大器晩成型であると思う。

人間にはそれぞれ、基本的に良いものをもっている。これは努力しても時期をまたねばならない。子供の家庭教育の中で人間体、すなわち、知、情、意の心で　①知恵がつき、②情(心)が出来、③意(創造）が出来る段階をえて、子供が成長するのだと思い、大処高所に立って、勇気と信念で教育を行ってほしい、やさしい表面的な和の教育はむしろ非行、破壊をまねき、心の教育こそ、敬（尊敬）になり、それが真の家庭教育である。これは夫婦のチームプレーで、和は母、敬は父親と言う立場で、環境を作り、夫婦和して、本当の教育がなされるように思う。

主な著書　「こころの教育」「太陽の教育」「生きる教育」（共立社）